

2020年12月13日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エレミヤ書 29 : 10～14

ルカによる福音書 11 : 5～13

「求めなさい」

<祈りについて>

今日の聖書では、イエスさまの有名な御言葉が語られています。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」

この御言葉は、キリスト教ではない方にもよく知られている、有名な言葉かも知れません。そして大体世の中では、与えられるのを待つのではなく、自ら進んで積極的に努力して求めていけば、必ず良い結果が得られる、というような意味で用いられています。

確かにその直前の、真夜中に友人にパンを貸してもらいに行くたとえは、どんなに無理なことでも、しつように頼めば、粘り強く求めれば、相手が根負けして与えてくれる、という意味に聞こえます。

しかし、ここでイエスさまが教えて下さったのは、そのようなことではありません。わたしたちの「しつようさ」や「努力」や「頑張る姿勢」に応じて結果が付いて来る、なんていうことは言われていないのです。頑張れば与えられるし、努力しないなら与えられないよ、という話ではないのです。

今日の箇所は、イエスさまが「主の祈り」を教えて下さった直後に語られています。

「求めなさい、探しなさい、門をたたきなさい」は、すべて祈ることを意味しています。

天の父なる神さまに祈り求めること。神さまの御顔を探し求めること。神さまの憐れみの門が開かれることを願うことです。

ここでは、そのようにして、わたしたちが天の父なる神さまに祈り求めるとき、それは必ず聞かれるのだ、という確かな約束が語られているのです。イエスさまが教えて下さった「主の祈り」。「父よ」と呼びかけるその祈り。それは必ず聞かれる、という約束と、そのゆえに、信頼して、安心して、父なる神に祈りなさい、ということが語られているのです。

祈りが必ず聞かれる、という約束の確かさは、わたしたちの祈る姿勢や、努力や、頑張りに掛かっているわけではありません。それは、わたしたちが祈る相手が、どういう方であるか、ということに掛かっています。

わたしたちは、天地の造り主、すべての支配者である神さまに祈ります。そしてイエスさまは「主の祈り」で、祈る時には、まずその神さまを「父よ」と呼び求めるように教えて下さいました。わたしたちは、父と子の親しい関係を築いて下さる、わたしたちが「父」と親

しく呼ぶことを許して下さる、そんな天地の造り主なる神さまに祈るのです。

そこで、今日の前半の、友人に夜中にパンを借りに行く話は、その父なる神さまがどういうお方か、ということ。そして後半の、父が子に良い物を与える話は、父なる神さまはわたしたちに最も良い者を与えて下さるお方だ、ということをお話しているのです。

<父なる神がどういうお方か>

まず、真夜中に友人にパンを貸してもらいに行く話を見てみましょう。これは、父なる神がどういうお方か、ということを示すお話です。

「あなたがたのうちのだれかに友達がいて、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パンを三つ貸してください。旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。』」

これは、旅行中の友達が、真夜中にある人の家に辿り着いたという場面です。当時のユダヤ人においては、旅人を手厚くもてなすのは当然のことであり、常識、義務とされていたことです。本来は、一人にパン三つは多すぎます。でも、長い旅をして疲れた友人を、この家の人は十分にもてなしたかった。その友人のために心を尽くしたかった。けれど、自分は何も持っていなかった。そういう場面です。

それで、この人は他の友人に、パンを貸してもらいに行きました。すると、その友人は家の中からこう答えるにちがいない、とあります。「面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。」

おそらく、小さな家で、身を寄せ合って眠っているのでしょう。戸も、当時は棒や鎖で閉じられていて、戸を開くためには時間もかかるし、子供も起きてしまう。断りたい気持ちが山々なのです。

でも、とイエスさまは言われます。「しかし、言うておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。」

これは、夜中に起こされた友人にとっても、同じユダヤ人として無視できない事態ではあるのです。とても面倒なことを頼まれているけれど、無視することも、ユダヤ人として恥知らずなことなのです。旅人をもてなすためのものを貸してくれなかった。後で何を言われるか分かりません。それで、ただ友達というだけで、心から親切に動いてくれるということが無いとしても、しつこく頼まれたなら、彼自身が恥をかかないためにも、対応せざるを得ないだろう。自分の体面を保つためにも、何とかしてくれるだろう。ということなのです。

そして、ましてや、です。まして、天の父なる神さまであるなら、どうだろうか。求められていることに応じないなんて、神さまの立場としてあり得るだろうか。いや、あり得ない、ということなのです。

ただの友人でさえ、しぶしぶでも自分の立場のために、体面を保つために、あなたの頼みを聞いてくれるのだ。ましてや父なる神は、その友人以上のお方に決まっているではないか、というのです。求めてくる者に与えないというのでは、神さまの名が廃ります。だから、神さまが祈りを聞かないなんてありえないのです。

しかもそれは、恥をかきたくないから、仕方なくやっとしぶしぶ動く人間の友人のようにという意味ではありません。人間の友人でさえ、そうやって求めに応じる。それなら、なおさら、罪人のあなたを赦し、自分の子とし、父となって下さった神は、そんなあなたが求めて祈る祈りを、心から喜んで、進んで、聞いて下さるに決まっているではないか。だから、あなたは安心して求めなさい。心置きなく頼りなさい。祈りなさい、ということなのです。

イエスさまはそのように、父なる神さまは、必ず祈りを受け止め、喜んで聞いて下さる方なのだ、と教えて下さっているのです。

<祈りとは>

確かに、わたしたちが熱心に祈ること、しつこいほどに、神さまに取りすがって、面倒に思われるほどに食い下がって祈り続けること。これは、大切なことに違いありません。そのような祈りの態度は、確かに必要なのです。祈りにわたしたちの熱心さが必要ではない、というわけではありません。むしろ熱心さが足りないのは悔い改めるべきことでしょう。

でも、わたしたちの熱心さには、限界があります。簡単に心が折れてしまうし、疑いや迷いも生じるし、すぐに疲れてしまいます。祈りが聞かれるかどうか、わたしたち自身の熱心さや、心意気や、態度によるというのなら、わたしたちは絶望するしかないでしょう。しかし、それは、わたしたちの熱心さに掛かっているのではないのです。祈りが聞かれる確実さは、祈りを聞いて下さる方がどういうお方か、ということに掛かっているのです。

わたしたちが、どんなに小さな声でしか祈れなくても、祈りの言葉が出てこなくても、落ち込んで、うつむいていたとしても。でもその中で「父なる神さま」と呼びかける。神さまに助けを求める。神さまを探し求める。神さまの恵みを待ち望む。そうするならば、父なる神さまは、神さまであるがゆえに。父となって下さった方であるがゆえに。すぐに御手を伸ばして、呼び求めた声を聞き逃さず、わたしたちの思いを受け止め、そして救いを与えて下さるのです。それは、神さまがそのような、愛と憐れみに満ちたお方だからです。

祈りは、わたしたちから出たものではなく、まず神さまから与えられたものです。わたしたちが、神さまを求めなければ、応じてもらえない。探さなければ、神さまがどこにいるのか分からない。門をたたくまでは、決して開いてもらえない、ということではありません。

神さまは、ずっとわたしたちの側におられ、ずっとわたしたちを見つめておられるのです。ずっとわたしたちの名前を呼んでおられるのです。ずっと耳を傾けて、わたしたちが神さまの名を呼ぶのを待っておられるのです。恵みを差し出して、わたしたちが手を開いてそれを受け取るのを、ずっと待っておられるのです。

この神さまの眼差しの中で、この恵みの中で、わたしたちは祈り始めるのです。

そして、わたしたちが父なる神さまに心を向けて祈るなら、わたしたちは、ずっと傍にいてくださった神さまを、すぐに見出すことが出来るのです。わたしの口から祈りの言葉が出るそばから、それが神さまに聞かれていることを知るので、すでに恵みに捕らえられている中で、自分が祈っているのだと知るので。

父なる神さまは、このようなお方です。だから、イエスさまは「父よ」と親しく、信頼して祈るように教えて下さり、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」と、この方に祈る、祈りの確かさを教えて下さったのです。

あなたの祈りは、すべてをご存知の父なる神が、いつもあなたを見つめ、愛して下さっている父なる神が、すべて受け止め、すべて聞いて下さるのだ。だから、安心して祈りなさい。信頼して祈りなさい。そう言って下さるのです。

<良い物を>

でも、祈ったことがある人の中には、こういう方がいるかも知れません。求めたけれど、与えられなかったことがある。心から願ったこと。泣きながら求めたこと。それが聞かれなかったことがある。

しかしイエスさまは、父なる神さまは、確かに祈りを聞いて下さる方であり、必ず良い物を与えて下さる方である、ということを示すために、後半のお話を語られました。11 節以下のところです。

「あなたがたの中に、魚を欲しがらる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。また、卵を欲しがらるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

イエスさまはまず、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることは知っている、と仰います。これは、罪に捕らわれている、決して完全ではない、そんな人間の父親でさえも、自分の子供には良い物を与えることを知っている、ということです。最近は虐待などもあって、自分の子供にも良い物を与えることができないような世の中ですが、しかしとにかく、当時のユダヤ人社会で、家族を守る立場であった父親は、罪深い者であっても、子供には良い物を与えようとする。魚を欲しがらる子に蛇を与えるような父親はいない。卵を欲しがらるのに、毒があるさそりを与える父親などいない。罪深い人間でさえ、当たり前のように、自分の子供には良い物を与えることを知っている、というのです。

まして、天の父は。愛する子であるあなたたちに、悪い物を与えるだろうか。いや、天の父は、必ず、ご自分の子供に、あなたたちに、最も良い物を与えて下さる。そうイエスさまは教えて下さるのです。

そして、その天の父が与えて下さる最も良い物とは、「聖霊」である、とされています。

天の父は、求める者に、聖霊なる神さまを遣わして下さるのです。聖霊は、わたしたちに信仰を与え、イエスさまの救いに与らせ、わたしたちを神の子として下さる霊です。神さまとの関係を与えて下さる、神さまとの交わりを与えて下さる霊です。

祈る時、わたしたちは聖霊を与えられ、父なる神さまとの親しい交わりに与ります。神さまの子として、神さまのものとして生かされている恵みを味わいます。これが、わたしたちに与えられる最も良い物なのです。父なる神さまとの交わりこそ、この方が共にいて下さることこそ、祈りが聞かれることであり、わたしたちに与えられる最も良い物なのです。

祈りが聞かれる、というのは、わたしたちの願いが何でも叶うことではありません。父親は、子供の言いなりになって、欲しがるものを何でも与えるわけではありません。子供のことをよく知った上で、愛をもって、必要な時に、必要なものを与えるのです。

わたしたちには、多くの願いや希望があります。また、多くの苦しみや悲しみや悩みがあります。そして、その思いは、すべて神さまに打ち明けるべきです。願いも、希望も、愚痴も、叫びも、神さまに聞いていただくことが大切です。でも、自分が望むような解決が与えられることが、神さまが祈りを聞いて下さった「しるし」なのではありません。

神さまは、わたし以上にわたしに必要なものをご存知です。そして、必ず最も良い時に、最も良い物を与えて下さいます。願ったものが与えられなくても、そのことを通して、神さまはもっとわたしに必要な恵みを与えようとしておられます。わたしが願う以上のものを、神さまは用意しておられるのです。そのことを信じるのです。信頼して、祈るのです。

ですから、わたしたちがこの世を歩んで行く中で一番必要なのは、求めるべきなのは、わたしたちを愛して下さる神さまが、いつも共にいて下さるということを、確かにされることなのです。それは、祈りによって、聖霊によって、与えられます。聖霊は、わたしたちに御言葉を与え、救いの恵みに与らせ、祈りへ、神さまとの交わりへと導きます。

ご自分の御子イエスさまを与えて下さるほどに、わたしたちを愛して下さる天の父なる神さま。わたしの労苦も、涙も、悩みも、痛みも、すべてご存知の天の父なる神さま。この方が、いつも共にいて下さるということ。その御手の中で、支えられ、守られ、生かされているということ。ここに、最も大きな恵み、最も良い物があるのです。聖霊を与えられ、祈りの生活を送る中で、わたしたちは父なる神さまとの関係を与えられ、そこで、力づけられ、慰められ、支えられ、与えられた命の日々を生きていくことが出来るのです。

これは、イエスさまが「主の祈り」を教えて下さった後に、語って下さったことです。

イエスさまが、祈るときには神さまを『父よ』と呼びなさい、と教えて下さいました。罪人であるわたしたちが、神さまに背き逆らったわたしたちが、本来は神の怒りにふれ、滅ぼされてしまうようなわたしたちが、天の神さまを「父」と呼ぶことが出来るのは、この方が十字架に架かり、わたしたちの罪を贖って下さったからです。この祈りは、この恵みは、イエスさまの十字架の血によって与えられたものです。イエスさまの命によって与えられた祈りです。

イエスさまの命の中で、わたしたちは安心して、信頼して、この救いを与えて下さった神さまに「父よ」と祈るのです。「主の祈り」を祈るのです。そして聖霊を与えられ、神さまとの父と子の親しい関係の中で、最も良い物を与えられつつ、信仰の道を歩いていくのです。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」祈りなさい。そうすれば、わたしたちはいつでも愛の眼差しを向けて下さっている父なる神さまと出会うことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたを「父」と呼ぶことが出来る恵みを、感謝いたします。あなたが、喜んでわたしたちの祈りを聞いて下さる方であること。最も良い物を与えて下さる方であることを感謝いたします。

あなたは、イエスさまによってわたしたちの罪を赦し、信じた者をあなたの子供として受け入れて下さいました。わたしたちに聖霊を注ぎ、祈ることが出来る恵みと、あなたとの親しい交わりを与えて下さいました。

わたしたちは、心をあなたに向けて祈る時、いつでもわたしたちを見つめ、愛し、憐れんで下さるあなたを見出すことが出来ます。祈りによって、あなたの恵みを見出させて下さい。ますますあなたに信頼して、安心して、依り頼む者として下さい。あなたの子として、これからも、あなたとの親しい交わりの内に、祈りの内に、日々を歩ませて下さい。

アドベントの時、わたしたちの罪を赦し、わたしたちと共にいるために、あなたが遣わして下さった救い主、イエスさまのご降誕を覚えます。インマヌエルの神の恵みを感謝して歩む日々として下さい。

このお祈りを、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン